

川が好き 空にうつつた 川も好き

(河川愛護月間推進標語 有國遊雲より)

7月



7月は河川愛護月間です。



川系男子の『川と人』めぐり No. 25～千綿川～

坂本貴啓 (筑波大学大学院 システム情報工学研究科 博士後期課程 白川直樹研究室『川と人』ゼミ)

『川と人』
めぐり

研究室のゼミ名『川と人』ゼミという言葉をもじって、『川と人』めぐりのタイトルで連載していきます。テーマは川と人。川が好きではない『川系男子』が川めぐりをしながら、川への思いや写真・動画などをご紹介します。

♪一番星みつけた
あれあの森の 杉の木の上に

(唱歌『一番星みつけた』 作詞：生沼勝，作曲：信時潔)

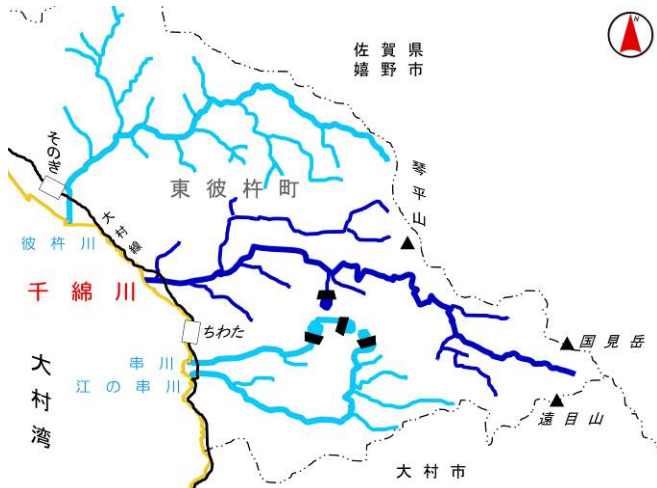


図1 東彼杵町の河川と千綿川
(東彼杵プロジェクトチーム作成の図を加筆修正)



図2 ホタル観賞会の行われる場所 (川は右)

1. ほたるの季節

5月中旬になると、九州地方の各河川でホタルが飛び始める。そのままホタル前線は北上し、関東付近は6月中旬から下旬にかけて舞う。

ホタルの光り方には東日本型と西日本型がある。東日本は2秒間隔とゆっくり光るのに対し、西日本では1秒間隔で点滅のように光る。どうして点滅時間に差があるかはあまりよく分かっていないようだが、なんらかの環境要因の差が影響しているようだ。

ほたるを見るとどこかほっとした心地がする。長い間、水の中・土の中で過ごし1週間しか地上にいられず、儂い光である。命を削って光る姿にその時々自身の心情と重ね、光の一つ一つに想い出がよみがえる心地にさせられる。今回は今年の蛍鑑賞と高校時代の蛍のことを書きたい。

2. 千綿川のほたる

2014年5月31日～6月1日にかけて長崎県東彼杵町へ行った。東彼杵清流会の池田さんから「蛍が飛ぶ頃に千綿川に蛍を見に来い。」と言われていたので、研究室の新人後輩一人を連れて行ってきた。

東彼杵町は人口約8900人の小さな町で、町の主要河川としては北から彼杵川、千綿川、串川、江の串川の4川がある(図1)。その中の千綿川は全長11.9km、流域面積27.46km²、平均河床勾配1/14の河川である。非常に河床勾配のきつい河川で、河口から2km程度遡っていくとすぐに溪流風景になる。

千綿川の河口から2kmほど遡ったところに八反田郷がある。この地区には千綿川の清流を守ろうと八反田郷自治会愛護会が活動している。今回はその風景を皆で楽しもうと初の蛍祭りが開かれた(図2)。



図3 夕暮れの押し迫った千綿川

夕暮れが近づいた頃(図3), 千綿川蛍祭りの会場を訪ねた。蛍祭りの会場は山際の棚田の畔の広場にテントが設けられており, 自治会の人らにより, 子供たちにジュースやお菓子が配られていた。子供達は畔を走りながら, 川沿いまで近づき, 蛍が出るのを今か今かと心待ちにしている。千綿川の川沿いは右岸側が棚田, 左岸側が山際になった溪流である。「日本の田舎」とはどこかと聞かれたら, ここはその代名詞にふさわしい風景である。谷間を水が流れ, 溪流に蛙の大合唱が響く。合唱が大きくなるにつれて闇が溪流に迫る。大人達は八反田郷の溪谷が見渡せる上段にある地区の人の個人の別荘「聖流庵」で夕涼みをしながら, 蛍が舞い始めるのを待っている。

子供も大人も蛍の登場を心待ちにした頃, 溪谷の底からふわっとした光が舞いあがってきた。光はどこからともなく次々と現れ宙を舞い, やがて山際の木にも派生し溪谷全体が光を帯びた。この場所には堰があるが, そこから一筋の水路が棚田中段に伸びているが, その水路に沿って光は乱舞し, 水みちもはっきりと照らしている。目の前に広がる蛍の乱舞に鑑賞する大勢は静かに酔いしれた。すると, 池田さんは静かに語り始めた。「自分も若い頃は道に迷い, 自分のやるべき仕事(キャンピングカーの職人)を見つげられるまでかなり時間がかかった。坂本くんも時間をかけて自分のやりたいことを磨かんね。」大学に長く残る選択をし, 常に道に迷い続けている自身にとって大いに勇気づけられ, 応援の言葉は千綿川の蛍の光とともに心に刻まれた。

聖流庵のオーナーの永富さんから「夏はここを拠点にして, 調査研究活動をしてもらっていいですよ。」とありがたいお言葉をいただいた。地元の人と交流しながら蛍の夕べは更けていった。



図4 下流部のうなぎ塚



図5 上流部の龍頭泉(千綿溪四十八潭)

3. 千綿川の魅力

千綿川は全長 11 kmほどの短い河川だが, 上流から下流まで見所が多い。まず, 下流域にはうなぎ塚(図4)という伝統的なしかけがCの字型に並んでおり, この中にうなぎが入る。内水面組合により管理されていて, うなぎ塚一つ一つは競売にかけられ, 塚によってうなぎのとれる確率が違うため, 値段もことなるそうだ。

また, 上流域には溪谷が広がっている。文化2年(1845年), 日田生まれの儒学者・広田淡窓は大村藩主に招かれ, この地を訪れる。その際にこの地の雄大な自然美に驚嘆し『千綿溪四十八潭』と自ら命名し, それぞれの場所に名前が付けられている。下流から玉すだれ淵, 蓮花淵, 白木淵, 霜降の滝, 呑空淵, 静止淵, 木葉不浮淵などがある。中でも有名なのは龍頭泉(図5)である。儒学者が160年以上も昔にこの地を訪れ, 千綿川の価値を見出していたことは現在においても誇るべきものである。さらに



図6 鹿の丸池（四ツ池）



図7 初夏の大野原高原

千綿川の水源となっている池の一つに鹿ノ丸池（図6）がある。これは東彼杵の四ツ池の一つで、江戸時代に鯨漁で富を得た深澤義太夫が私財を投げ打って、大村藩の新田開発のために開発した。現在でも重要な農業用ため池として使用されており、ため池の文化的価値も非常に高い。

また、さらに千綿川の上流域の一部は大野原高原（図7）になっており、なだらかな丘陵地が広がっている。冬に訪れた時には枯草の草原であったが初夏の高原は若々しい緑が芽吹き、そよ風がそよいでいた。

このように千綿川だけみても東彼杵には美しい風景と文化的景観が数多く残っており、先人からの宝の風景は今も美しさを誇っている。

初夏の千綿川に蛍が見えたように、次回8月に訪れる際には川の中に入り、新たに価値あるものを発掘していきたい。

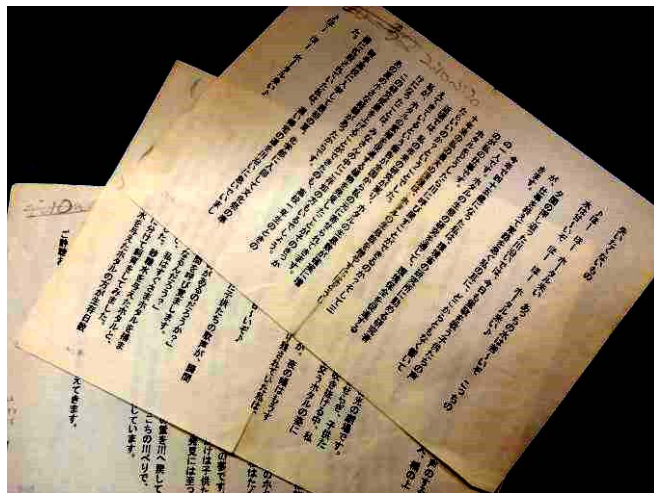


図8 本の中から出てきた高校時代の原稿

4. 蛍への想い

小学校、中学校、高校と蛍にはその時々には様々な思い出がある。以前、小学校、中学校時代のホタルの思い出を書いたので、今回高校時代のホタルの思い出を少しご紹介したいと思います。

この前自宅を整理していたら色褪せた原稿用紙が出てきた。高校1年生の頃に連休中の宿題として出され、何か未来の自分のことを書いてこいというもの。連休最終日に好き勝手に書いたものだったが、国語教師の目にとまり高校の文化祭の弁論大会で発表することになった。国語教師に元原稿を何度も修正されながら、発声の練習、立ち振る舞いなど放課後の教室で特訓したのを思い出した。ちょっと恥ずかしい部分もあるが、その時の原稿がこれだ（図8）。

【失いたくないもの】

（2003年6月鞍手高校弁論大会原稿：高校1年時）

♪ほー ほー ホータル来い あっちの水は苦〜い
ぞ こっちの水は甘〜いぞ ほー ほー ホータル
来い♪

夕闇の押し迫った川沿いでは、今日も蛍歌を歌う子供たちの声が、仕事を終えて家路を急ぐ私の耳に、どこからともなく響いてきます。

今年で四十五歳になった私は、環境省の研究所に勤める研究者の一人です。ホタルの生態を通じて、環境保全を促進するのが私の仕事です。

ホタルをどうしたら川に呼び戻すことができるのか？そして三十年来の私の最大の課題は、ホタルの生息数を増やすにはどうしたらいいのか？というこ

とでした。

近頃では、私の年来の研究が実り、ホタルの生息数が確実に増えてきているという報告が全国から私の元に寄せられてきます。私が、ホタルの繁殖を促進する植物を発見したことがそのきっかけになったことは、みなさんの中にご存じの方もいるでしょう。

この研究成果を上げることができたのも、高校一年生のときのあの夏の小さな経験があったからです。

鞍手高校に入学して最初の夏、化学部に入部して文化祭の準備に忙殺されていた私は、遅い帰宅の道を川沿いに急いでいました。

♪ほー、ほー、ホータル来い♪

子供たちの歌声がします。私は自転車を止めました。声のする方に目を凝らしてみると、小学生ほどの子ども達が数人、橋の上に腰掛けて蛍歌を歌っています。

♪あっちの水は苦～いぞ

橋の下は夢見るような、たくさんのホタル達の光りの劇場です。

水面を照らし出す優しい光、涼やかな川のせせらぎ、子供達の歌声、初夏の夜風が辺り一面をやわらかに吹き抜ける中、私もまたいつしか橋の上に腰掛けて、しばし飛び交うホタルの姿に見入っていました。

どれくらいの時が過ぎ去ったことでしょうか。夜の帳はもうすっかり降り尽くし、いつの間にか闇の中に取り残されていた私は、そろそろ帰ろうと立ち上がりました。

♪こっちの水は甘～いぞ

闇の中から幻のように立ち上ってきた子供たちの歌声が、瞬間に私を捕えました。

「そもそも甘い水、苦い水というものがあるのだろうか？」

ひとたび沸き起こった疑問が次の疑問を呼び覚まします。

「蛍に甘い水を飲ませるとどうなるんだろう？」

居ても立ってもいられなくなって、私はすぐさまホタルを捕まえて、実験してみることにしました。砂糖水を与えたホタルと、普通の水を与えたホタル

と別々に分けて飼育をしてみました。

結果に驚かされました。砂糖水を与えたホタルの方が生存日数が長く、さらに産卵数も倍以上に増えることが分かったからです。大発見でした。

疑問がさらに湧いてきました。自然界に砂糖水そのものが存在するのだろうか？もちろん存在しません。とすれば、甘い汁を分泌する植物の存在が考えられます。その植物を特定し、その植物を水辺に生息させて全国的に繁茂させれば、将来的には、ホタルの生息数を増やすことができ、環境問題の解決に大いに貢献できるのではないだろうか。

こうして私は、長年かけて、ホタルに良い影響をもたらす植物を探し始めました。

そして三十年かけてついにその植物を発見し、たくさんのホタルが生息できる現在の環境に至っているわけです。今、私はたくさんのホタルに囲まれて、この上なく幸せです。

・・・・・・と今まで物語ってきた話が私の理想であり、私の夢です。私は最近になってホタルの研究を始めました。きっかけは子供たちの蛍歌でした。もちろん、まだ三十年後のような発見には至っていません。

しかし、いつの日か必ず発見をし、たくさんの蛍を川へ戻してみせます。そしてその時こそ、再び日本のあちこちの川べりで、子供たちの蛍歌を聴くことができると私は信じています。

♪ほー ほー ホータル来い♪

今日もまた、子供たちの歌声が聞こえてきます。ご清聴ありがとうございました。

今年の千綿川のホタル、高校時代の蛍の弁論原稿。それぞれ蛍に関わる記憶の一つとしてここに大切に記しておきたい。

【筆者について】

坂本 貴啓 (さかもと たかあき)

1987年福岡県生まれ。北九州市で育ち、高校生になってから下校途中の遠賀川へ寄り道をするようになり、川に興味を持ち始め、川に青春を捧げる。高校時代にはYNHC(青少年博物学会)、大学時代ではJOC(Joint of College)を設立して川活動に参加する。自称『川系男子』。いつか川系男子や川ガールが流行語になることを夢みている。筑波大学大学院 システム情報工学研究科 博士後期課程 構造エネルギー工学専攻在学中。白川直樹研究室『川と人』ゼミ所属。研究テーマは『河川市民団体における活動量の定量的分析』と題し、河川市民団体の活動がどの程度河川環境改善の潜在力を持っているかについて研究中。最近のお気に入りにはプールで素潜りの練習をすること。

